

ガラッ八祝言

野村胡堂

一

ガラッ八の八五郎が、その晩むこいり聾入をすることになりました。

祝言の相手は金沢町の酒屋で、この辺では有福の聞えのある多賀屋勘兵衛。嫁はその一粒種で、浮気っぽいが、綺麗さでは評判の高いお福という十九の娘、——これが本当の祝言だと、ガラッ八は十手捕縄を返上して、大店おおだなの聾養子に納まるところですが、残念さんねんながらそんなうまいわけには行きません。

実際のところは、その晩聾入りの行列などを組んで歩いたら、命を奪られるかも知れないという、——真実の聾、仲屋せがれきんたろうの伴錦太郎に頼まれて、いやいやながらガラッ八は、聾入の贖物にせものになることを引受けさせられてしまったのです。

この頼みが持込まれたとき、さすが暢気のんきもの者のガラッ八も、再三辞退しました。が、錦太郎の頼みがいかにも真剣で、涙を流さぬばかりに拝むのと、親分の銭形平次が、多賀屋の身上しんしょう、主人勘兵衛の評判から、娘お福の行状、それから聾の仲屋の暮し向きから、錦太郎の人柄まで調べ抜き、『なるほどこれは、うっかり祝言をさせられない』ということが解り、自分からもガラッ八を説いて、『いざ三々九度の杯という時、真物ほんものの聾の錦太郎と入れ替わらせるから』という条件で、ようやく聾入にせくびの偽首にせくびになることを承知させたのでした。

祝言は多賀屋の身代にしては出来るだけつつましやかに、当日の客は余儀よぎない親類を五六人だけ、聾入りもほんの型ばかりとい

うことにして、偽首の八五郎が、仲人宝屋祐左衛門夫婦に護られ、駕籠の垂たれを深々とおろして、多賀屋へ乗込んで行ったのは、秋の宵——酉刻半むっはんそこそこという早い時刻でした。

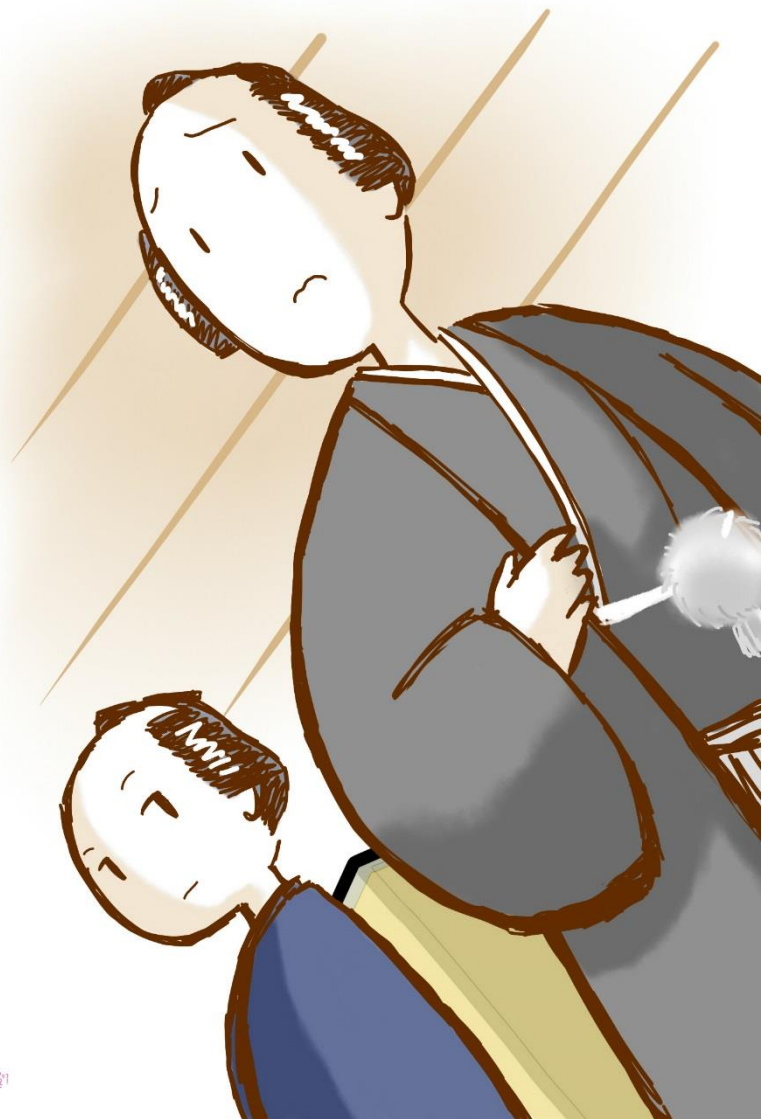
途中は平次の子分や、ガラッ八の友達が多勢で見護り、行列はまず何の障りさわもなく多賀屋の門口を入りました。紋切型の挨拶を上うの空に聞いて、奥へ通されると親分の平次が、恐ろしく真面目まじめ腐った顔をして迎えてくれます。

「どうだい八、満更まんざら悪い心持じゃあるめえ」

最初の平次の言葉はこんな調子でした。

「変な心持ですよ、親分」

「あやかりものだよ、——化け序ばけついでにもう少しその儘ままにしていってくれ。真物の聳したくは陽が暮れるとすぐここに来ているが、肝心かんじんの嫁の支度しだくが出来ない。三々九度はいずれ一刻も後のことだろう、その



時はお客様で鰯腹^{たらふく}呑むが宜い」

「呑んだってつまらねえ」

「ひどく落胆^{がっかり}するじゃないか、——だがな八。聾^{ねら}にもよりけりだが命を狙^{ねら}われる聾^{ねら}なんてものは、あまり有難くないぜ」

「有難くなくたって、偽首よりは器量が良いじゃありませんか」
「まア、そう言うな」

ガラッ八の不満は、平次も察しないではありませんが、こうするより外に術^てのない切羽詰^{せつば}った情勢だったのです。

「親分は、いろいろの事を調べたんでしょう」

「まア、調べたつもりだ」

「誰がいったい聾^{ねら}を殺そうなんて気持になって居るんで——」

聾^{ねら}の錦太郎が青くなって平次のところへ飛込んだのは知っています、深い事情はガラッ八もよくは知らなかったのでしょう。

「金沢町の若い男は皆んなだよ」

「へエー」

「大きな声じゃ言えねえが、よくもあんなに若い男と懇意^{こんい}になつたと思うくらいだ」

「へエー達者な娘だね」

「祝言の晩錦太郎を打ち殺そうと言い出したのは三人ある」

「へエー」

「中でも氣違いじみているのは、やくざの信三郎と髪結^{かみゆ}いの浪蔵^{なみくら}さ、——聾^{ねら}の錦太郎奴^め、歩いて来るなら刀で向うが、駕籠^{かろう}で来るなら何処^{どこ}かに待ち伏せしていて、土手っ腹へ槍^{やり}をブチ込んでやる——
——って、言って居たそうだ」

「危ねえな、親分」

ガラッ八も少しばかり薄寒い心持になります。

「尤も、お前には其処までは聴かせなかつたよ、土壇場になって、
聲の身代りになるのが嫌だなんて言い出されると困るからな」

「呆れ返るぜ」

「何んな仔細があるか解りませんが、杯事の始まる前、聲の支度
部屋を占領して、平次はガラッ八相手にこんな無駄を言っている
のでした。」

「大丈夫だったのかい、八。よく脇腹のあたりを見るが宜い、槍
の棘なんか残っていると、後でとがめるよ」

「冗談じゃない、槍の棘なんか立てられてたまるものですか、――
本当にそんな危ない聾入だったんですかい、親分」

ガラッ八も、済んだことながら、今さら怖気をふるいました。

「大丈夫だよ、吠える犬は噛み付かない」

「へエ――」

「その上、途中は二十人もの眼で見張らせたんだ。信三郎や浪蔵
は指も差せるこっちゃない」

「驚いたね、どうも。そんな話を聴くと脇腹がムズムズしますよ」

「三々九度の杯さえ済んでしまえば此方のものだ。人の女房に
なってしまったお福のために、人殺しの罪を背負って、お処刑台
に載っかるのはどう考えたって知恵が無さ過ぎるよ、今晚一と晩
だけ越せば天下泰平さ」

「そんな思いまでして、あの錦太郎とか言う野郎は祝言をしたい
のかね、男の切れっ端のくせに」

八五郎が少しく義憤を感じたのも無理のないことでした。仲屋
の錦太郎というのは、身上こそ軽いが、なかなかの好い男で、金

持の一人娘で、神田で指折りの綺麗首であるにしても、評判の蓮葉娘つばむすめの聳おには惜しいほどの若者だったのです。

「多賀屋は神田で幾軒という分限ぶげんだ、その上お福はあの通り美しい。大概たいがいのことなら無理をしたくなるだろうよ。それに、多賀屋の主人勘兵衛と、仲屋の先代は無二の仲で、やりましよう、是非貰おうと約束し、藁わらのうちから証文を入れたり証人を立てたりしたほどの許嫁いいなすけなんだとよ」

「不自由なことだね」

「町人はそれが何よりのほまれさ、約束を守るといふのは決して悪いことじゃない」

「本人の気持などを其方そっちのけにね」

「たいそう今晚は機嫌が悪いようだな、八」

「金沢町小町のお預けなんぞ喰わされると、たいがい機嫌も悪くなりますよ」

ガラッ八は全く以ての外の機嫌でした。

「ところで、杯事の支度はまだかな」

「親分はそんなにしていって構いませんか」

「構わないとも、狙ねらわれているのは聳おだろう。その聳がここに居んだもの、平次がこう附いているほど確かなことはないじゃないか」

「全くね」

ガラッ八の八五郎は、照れ臭く袴はかまの皺しわばかり気にしております。どうもしびれが切れて叶かなわない恰好かっこうです。

「尤もっとも、真物の聳でなくて、お前は本当に仕合せだったかも知れないよ」

平次は話頭を転じました。

「へエ——？」

「あんな評判の蓮葉娘のお守をして、一生踏み付けられて暮すのは、楽な仕事じゃないぜ」

平次の声は小さくなりました。

「へエ」

「その上仲屋は十年も前に身代限りをして、近頃はその日の物にも困っているんだ。錦太郎はどんなに歯ざしりしても、多賀屋へ聲にでも入らなきゃ身の立てようはない」

「——」

「親と親との昔々の約束は、お福を仲屋が貰って、錦太郎の嫁にする筈だったとよ、それが、仲屋の主人が死んで、身代が滅茶滅茶ちやめになつて仕舞うと、一人娘を嫁にくれとは言いにくかろう」

「なる程ね」

「尤ももつと錦太郎は腹の中じゃ面白くないかも知れないよ、——それに、聴こえるかい、八」

「へエ」

「錦太郎には他に言い交かわした女があるんだってね」

「太てえ野郎だね」

「でも、背に腹は代えられなかったのだろう」

「俺なら背と腹を代えるがな」

「それは他人様ひとの言うことだ、——おや？」

不意に平次は聴耳ききみみを立てました。

「何です、親分？」

「変な音がしたようだ、——来い、八」

「あつしが行っても構いませんか」

「その窮屈袋と紋附をかなぐり捨ててるんだ」

言い捨てて平次は飛出しました。かなり大きな構えですが、唐紙を二つばかり開けると、そこは嫁の支度部屋になっていたのです。

二

「あつ」

「灯だ、灯だ」

平次の声が響くと、さすがに気の付いたガラッ八は、行燈を提げて飛込んで来ました。

「嫁がやられたッ」

灯の中に崩折れた花嫁姿、緋縮緬が血のように燃えて、それは凄まじくも華やかに浮いたのです。

「入っちゃならねえ、入った奴には皆んな下手人の疑いがかかるぞ。八、そこで頑張つて、一々出入りの顔を調べろ」

平次の声が響くと、廊下まで殺到した群集が、雪崩を打って引返します。

「私は構わないでしょう、親分」

その跡に残されて、おろおろしているのは真物の聾、仲屋の錦太郎でした。二十五六の華奢な男、青い顔をして、激動に顫えておりますが、性根はなかなかの確りものらしくもあります。

「いや、こいつは聾殿に見せる幕じゃねえ。親御の勘兵衛さんだけ入って下さい——それから町内の外科を大急ぎで頼むんだ、深

傷だが、命は――」

平次は手負を抱き起してフツと口を緘つぐみました。

「親分さん」

この時、ようやく主人の勘兵衛が飛んで来たのです。

「大変なことになったぜ、御主人」

「どうしよう、親分」

六十男の勘兵衛は、娘の後ろから恐る恐る差しのぞきます。それでも、自分の身体で庇かばって、多勢の目から手負の姿を見せないようにしながら――。

「八、何をぼんやりしているんだ。曲者は外へは出られない筈だ、出口出口は先刻の俺の声一つで、二十人の下っ引が固めている。手前は錦太郎を見張っているが宜い。自棄やけになった曲者は何をやり出すか解らない」

平次の命令は周到を極めます。

そのうちに外科が来て、花嫁の傷をしらべました。傷は深くはないが、急所をやられたので、朝までの命がむずかしкаろうと言う噂が、誰からともなくパツと家中に伝わります。

手負を外科と主人に任せまかせた平次は、花嫁の支度部屋から出発して、縁側へ、庭へと調べて行きました。この道以外は人目の関が幾重にもあった筈ですから、どんな忍びの名人でも、人に見とがめられずには通れなかった筈です。

たった一つの手燭てしよくで、平次は実によく調べて行きます。生湿りなまじめの庭には誂あつちえたように足跡があつて、それがかなり大きいことや、突当りの木戸は外から簡単に輪鍵わかぎの外せることを見極め、

「いるか」

静かに声をかけると、

「親分」

木戸の外から応^{こた}えた者があります。言うまでもなく下っ引の一人。

「誰も出た者はないな」

「ありませんよ、親分」

「誰でも構わない、外へ飛出そうとする者があったら、遠慮無しに縛り上げてくれ」

「へエ——」

「御苦労だな」

平次は言い捨てて元の縁側に帰りました。

「おや？」

見ると、そこにも泥の足跡が——よく拭き込んだ縁の板を薄く染めているではありませんか。足跡を追って行くと、真つすぐに花嫁の部屋に入って行きます。

念のためにツイ傍^{そば}の上便所の扉をあけると、二本燈心の薄明りで、——草履^{ぞうり}が一足。手に取り上げて裏返すと、生湿^{なまじめ}りの苔臭^{こけくさ}い土が一面に附いているではありませんか。

「親分」

不意にガラッ八が顔を出しました。

「何だ、八？」

「刃物を見付けました」

手拭に包んで来たのは、ヒ首^{あいくち}が一口、切先が血に染んで、少し刃こぼれがあります。

「何処にあったんだ」

「あつしが居た部屋の花瓶かびんの中ですよ」

「誰が見付けたんだ」

「錦太郎が気が付いたんで——」

「馬鹿ッ、——その錦太郎を見張って居ろと言ったじゃないか」
平次の声は急に激しくなりました。

「だって、親分」

「何がだってだ、——刃物なんざ、何処にあつたって構うものか、
錦太郎に間違いがあつたらどうするつもりだ」

「へエ——」

ガラッ八は不平らしく引返しました。しばらくその後ろ姿を見送っていた平次、何を思い付いたか、猛然として後を追いますが、それも及びませんでした。ガラッ八がちよつと眼を離れた間に、事件は思いも寄らぬ方へ急展開をしたのです。

「あッ、やられたッ」

ガラッ八の声が突っ走ります。

「やったな、畜生ッ」

飛込む平次。先刻まで平次とガラッ八がいた部屋に、錦太郎は半顔血に塗れて、氣を喪うしなっていたのです。

「どうした」

「氣をしっかり持て」

平次はそれを後ろから抱えて、あり合せのぬるくなった茶を吞ませました。

「あ、有難うございます、もう大丈夫です」

錦太郎は極り悪そうに居住いずまいを直します。

「どうしたというのだ」

「何処からともなく、こいつが飛んで来ましたよ。頬に当たったことまでは知っていますが——面目次第もございません。私は気が弱いんで」

錦太郎は恥かしそうに首を垂れます。切られたのは左の頬先、ほんの引つ掻きほどですが、潮時と見えて、血が顔半分を染めております。——尤も錦太郎が夢中で傷を押えた手で汚したせいかも知れません。

刃物はガラッ八が差して来た、犬おどかしのような脇差わきざし。こいつは聳入の恰好にはなくてはならぬ道具ですが、先刻さつきここへ抛り出して、嫁の部屋へ駆付けたのを、曲者はさっそく利用して、縁側から抛ほおったのでしよう。

「曲者の顔を見なかったのかい」
傷を見ながら平次は訊ねました。

「後ろから抛ほうられたんで、何んにも見ません」

「そいつは災難だったね。尤ももっと、大難が小難で済んだようなものだ。幸い、町内の外科が来て居るから、手当して貰うがよからう」

「有難うございます」

「ところで、曲者はいよいよ家の中に居るに決ったぞ。床を剥はぎ、天井へ潜り込んでも捜し出そう、八」

「おーい」

「何処どこにいるんだ」

「押入の中ですよ」

八五郎の返事は陰に籠こもりました。

「その意気だ、しっかり捜せ、——外から二三人呼び入れて手伝わせても宜い」

疑いは三人にかかりました。

多賀屋の外を、ウロウロして居た、やくざの信三郎と、髪結の浪蔵と、——これはお福の甘い言葉に取り逆上^{のぼ}せて、是が非でも祝言を妨^{さまた}げようという仲間——。

あとの一人は、多賀屋の番頭で品吉、三十そこその平凡^{へいぼん}な男ですが、これもお福の笑顔に釣られて、多賀屋の養子になれるものと思ひ込んでいた男でした。

三人とも機会がありました。が、便所の草履^{ぞうり}をはいて細工をしたり、ヒ首^{あいくち}を聳^かの部屋の花瓶^{かびん}に入れるようなことは、品吉でなければ出来ない芸当です。

「この野郎ですよ、親分。思ひ切り引叩^{ひっぱた}いて見ましようか」

聳^かから岡^{ひきぬ}つ引に引抜いたガラッ八は、品吉を縁側に引据えて威^い猛^{たけだか}高になります。

「待て待て、もう少し考えてからにしよう。家にいる者が怪しいとなると、手代、下女、下男、それからお前も俺も、聳^かの錦太郎も怪しくなる、——こいつはそんな浅墓^{あさはか}な企^{たくら}みじやあるめえ。その番頭は下っ引に見張らせておけ、——ところで曲者は錦太郎を殺すつもりはなかったかも知れないが、——お福は確かに殺すつもりだった、——お福を殺していった誰^{もう}が儲かるんだ」

「——」

平次が変なことを言い出すのを、ガラッ八は縁側から聴いておりました。

「お福が死んで、一番損をするのは誰だ」

「父親と聾の錦太郎じゃありませんか」

ガラッ八の応えは素直で簡明です。

「ところで今は何刻なんどきだろう」

平次はまた変な事を訊きます。

「亥刻半よつはんですよ、親分」

「あと半刻で明日か」

「――」

「明日は戌いぬで仏滅ぶつめつで、やぶるという日だ。祝言にはいちばん嫌われる」

「それが何うしたんで、親分」

「明日祝言がいけないとなると、今日のうちでなければなるまい」

「誰が祝言をするんで？ 親分」

「多賀屋の娘お福と、仲屋の倅錦太郎だ」

「えッ」

平次の言葉の意外さに、驚いたのは、隣の部屋で外科に手当をして貰っている錦太郎自身でした。

「お福は深傷ふかでだが、折角ここまで運んだ祝言、息のあるうちに盃事がしたいと言うのだよ。しおらしい望みじゃないか。父親の勘兵衛は、涙なみだながらにその支度をしている。幸い聾の錦太郎は浅傷あさでだ、子刻前このつに祝言の盃事をして、死んで行く娘を安心させようと言うのだ」

「――」

ガラッ八と錦太郎はゴクリと固唾かたずを呑みました。事件のあまりに不思議な展開に、考えることも、異議いぎを挟さしはさむことも出来なかつ

たのです。

「この上に妨さまたげが入ってはいけない。浪蔵と信三郎と品吉は縛つてあるが、この上どこに寝刃ねたばを合せている者がないとは限らない。善は急げだ、手当が済んだら行こうか」

平次はこう錦太郎と八五郎を促うながし立てるのです。

四

その夜の婚礼は、世にも不思議なものでした。

多賀屋の二階二た間を打ち抜き、善美をつくした調度の中に、眩まばゆいばかりの銀燭に照されて、凄まじくも早桶はやおけが一つ置いてあつたのです。

金屏風きんびょうぶ、島台、世の常の目出度いづくめの背景の中に、それはまた、何と言う恐ろしい取り合せでしょう。

早桶の中に、仲人宝屋祐左衛門夫婦なこうどたからや、多賀屋の主人勘兵衛、親類五六人、老番頭宅松が左右に居並びました。

一步、この席に入った錦太郎の顔色は、さすがにサツと変わったのも無理はありません。

「これは？」

ツイ唇をついて出た言葉、頬の色は半面をつつんだ繃帶ほうたいよりも白く見えます。

「娘はとうとう相果あいてました、曲者の手に掛けて、たった十九で――」

多賀屋勘兵衛は絶句ぜっくしいしい、教わったせりふのように、こう言うのです。

「それで、私は、私は？」

「祝言の盃事をするのだ。あんなに焦れた仲だもの、せめて三々九度でも済まさないや浮び切れまい」

平次の声は妙に荒つぽく響きました。

「――」

寂とした一座、ともすれば、滅入るような緘黙が続きそうでありません。

「さア、早桶の蓋を払って、花嫁の最期の姿と対面してくれ」
平次は後ろからせき立てます。

「――」

思わず尻ごみする錦太郎。

「解らねえ聾じゃないか、三々九度は偽首じゃ勤まらないよ」

ガラッ八は後ろから抱きすくめるように、早桶の傍の座に錦太郎を引据えました。

「そんなに遠慮するなら蓋は俺が取ってやろう」

平次は早桶の側に寄ると、その蓋を取って、桶ごとパツと引っこり返しました。

「あッ」

中から現われたのは、お福の死骸と思いきや、――血の附いた
ヒ首と、ガラッ八の脇差と、便所の草履と、それから、最後に一
つ、血に染んだ手拭が――と筋。

「錦太郎、これを知って居るだろう。手拭はお前の品に相違ある
まい、花嫁を殺して間もなく押入で見つけた品だ」

「――」

「さア、のがれぬところだ、白状せい。聾入の晩、花嫁を自分の

手で殺すとは何としたことだ、——言いのがれは無用だぞ。この家は宵から大勢で取囲んでいる、曲者は外から入る筈はない」叱咤する平次、一座は思わず逃腰になって、この不思議なクライマックスを見詰めております。

錦太郎は唇を噛みました。が、しばらく自分の心持を落着けると、白々とした観念の顔を挙げ、キッと平次を睨み、それから主人勘兵衛の顔を見据えながら、少しかすれたが、落着き払った声でこう言うのです。

「白状するまでもあるまい、——殺したがどうした」

「錦太郎、それがお前の言う事か」

平次も思わずカッとなります。

「おう、三千両の身上を横取りされた上、江戸一番の蓮葉娘と添うくらいなら、俺はどんな事でもする」

錦太郎の声は次第に疳が立って、引裂かれるような調子になります。

「宜い心掛けだ、——が、お前は誰を相手にして芝居を打っているか忘れたんだろう、——俺のところへ駆け込んで、聲の身代りを頼んだ時から、俺は臭いと睨んだよ。手を尽して調べ抜いて、万に一つの手抜りの無いところまで運んでおいたとは知るまい、——毘に陥ちたのはこの平次ではなくて、お前だった」

「それほど用心深い銭形平次が、お福の殺されるのを知らずに居たろう」

錦太郎は勝利感に陶醉して亢然となりました。

「よしよし、その氣でいるなら逢わせるものがある、——それ」平次の手が動く、錦太郎の後ろの金屏風が取払われました。

その奥に置かれたように坐っているのは、何と、錦太郎が殺した
と思い込んでいる、お福の健やかな姿ではありませんか。

「あッ、お前は、お前は」

おどろく錦太郎。

「おどろいたか錦太郎、聾に身代りがあれば、嫁にも身代りがある事に気が付かなかったろう。お前がヒ首で突いたのは、忠義な下女のお常だ。振袖の下へ鎖帷子くさりかたびらを着せておいたので、力任せで刺したヒ首も、五分とは斬らなかったよ」

「――」

錦太郎は何べんかお福に飛びかかりそうにしましたが、その都度、平次の眼に威圧されて、キリキリと齒を喰いしぼるばかりです。

「便所の草履をはいて、庭木戸を開け、曲者か外から入ったように見せかけたり、八五郎の脇差で、自分の頬を斬って、自分の身体に附いた血を胡麻化ごまかしたりしても、この平次の眼を騙だますことは出来ない」

「――」

「お前は――」

つづける平次の声を遮さへぎって、錦太郎の怒りは爆発しました。
「止してくれ、俺はその豚の仔このような雌めすと祝言せず済んだだけでも沢山だ、――何でえ、岡っ引のくせに。何も彼も見抜いたつもりでも、人の心の見透みとおしはつくまい」

「それがどうした」

静かに迎えた平次、このたけり狂う男に、もう少し事情を説明させる必要があったのでしよう。

「何も彼も見抜いても、多賀屋勘兵衛の悪企みだけは見抜けなかったじゃないか」

「何？」

「言ってやろう、——その多賀屋勘兵衛は、今から十年前、死にかけている俺の父親を騙し、親切ごかしに、仲屋の身上を皆んな取上げてしまった大悪党だ」

「嘘だ」

勘兵衛は不意に怒鳴りました。よく光る頭から、ポツポツと湯気が立っております。

「――」

平次は黙ってそれを押えたまま、一方、錦太郎の言葉が続けさせました。

「俺が成人するまでという約束だった、——証人はうんとある、現にここにいる仲人の宝屋もその証人の一人になって宜い筈だ。取上げた金は三千両、——この錦太郎が成人すれば返す筈のが、二十歳になっても二十五になっても返さない。お蔭で俺は仲屋の暖簾と貧乏を背負って、血の出るような苦労をしながら育った」

「――」

「父親の遺言状は宝屋が預っている。それには、お福とこの錦太郎と一緒にする約束が書いてある筈だ。万一、二人が一緒になら

ない時は、三千両の金は利息をつけて俺に返さなければならぬ。十年の利息をつけて、三千両の金を返すことは、今では多賀屋の身代を振っても出来ないことだ」

「――」

「お福を俺の嫁にしても、行く行くは仲屋のものは仲屋に返さなければなるまい。――悪知恵のたけた勘兵衛は、俺を簪にして多賀屋の養子に直し、難癖なんくせをつけて追出すことを考えた、――売女ばいた根性こんじょうの――江戸一番の性悪娘を、この錦太郎に押しつけ、嫌応いやおう言わせぬ祝言をさせようというのは、皆んなそのためだ。俺は断つたとも。一応も二応も断つたが、――十年越しの借金を払って、母一人を安穩あんのんに養うためには、断つてばかりも居られなかった。――口惜くやしいが俺は承知した、言い交した女には因果いんがを含め、――母にも観念して貰って――」

錦太郎は泣いておりました、苦渋くじゆうの色が顔一面の筋肉を痙攣けいれんさせて、声のない鳴咽おえつが、ときどき激情の言葉を吃どもらせます。

「それから何うした」

と穏やかに平次。

「俺は捨鉢すてばちになった。が、母が生きているうちは、命を捨てて多賀屋へ斬込むわけにも行かない。お福が江戸一番の蓮葉娘で、大勢の馬鹿な男に騒がれて居るのを幸さいわい、親分に頼んで身代り簪したてを仕立て貰い、俺はそつとここへ来て、お福を殺す工夫をした。大身代を継つぐ花簪が、金沢町小町と言われた嫁を、婚礼の晩に殺す筈はないと世間では思うだろう」

錦太郎の言葉は次第にか細い述懐じゆつかいになって、ともすれば途切れ

「それから？」

平次はもういちど静かに促しました。うなが

「お福さえ居なきや、俺は勝手だ。親父の遺言状おやじ ゆいごんじょうが出ても、三千両の身上しんしょうを受取るだけで、何の怖いこともない」

「――」

「細工が過ぎて親分に見現はりつけわされた、――口惜くやしいが仕方がない。サア、縛ってくれ、磔刑はりつけにでも火焙ひあぶりにでもしてくれ、――その代り、万一俺の母親が餓死うえじするような事があつたら、俺は死んだつてお前たちを安穩あんのんにはおかないぞ」

紋附姿の錦太郎が、身を顫わせ、畳を叩いてこう言うのです。

「嘘だ嘘だ」

抗弁もしどろもどろに、多賀屋勘兵衛は立ったり坐ったりしております。

誰ももう、口を利く者ありません。

平次は一座の空気を、慎重あじわに味い尽しました。善惡邪正ぜんあくじやせいが、鏡に映るように判って行くような気がします。

「八」

「へエ――」

突如、平次に呼ばれてガラッ八は入って来ました。

「この家は出口出口を塞ふさいでいるだらうな」

「へエ――、下っ引が五六十人、十重二十重とえはたえに囲んでいますよ」

「よしよし」

八五郎の応えの常識以上に大袈裟おおげさなのを、平次は笑いもせずにならずきました。

「何をやらかすんで、親分」

「俺の指した野郎を縛れ」

「へエ——」

「それ」

平次の指は、ピタリと、仲人宝屋祐左衛門なこうど ゆうの胸を指したのです。

「御用ッ」

「わッ、御勘弁。私は、私は何にも知りません」

あわてた宝屋、畳の上を額おほで泳およぐような恰好になるのを、ガラッ八は襟髪を取ってピタリと引据ひきすえました。

「野郎ッ、神妙にせいッ」

「申します、申します。皆んな申上げてしまいます。——多賀屋さんには数々のお世話になってるので、断り切れなかったのをございます。——仲屋さんの先代の遺言状ゆいごんじょうは、すぐこの場で錦太郎さんにお渡し申します、——御勘弁を。お願い」

宝屋祐左衛門は、懷中から紙入を取出して、ガラッ八の腕力の下に、何やらモゾモゾ続けております。

「多賀屋さん、この祝言は取止めにしても異存いぞんはあるまいな」
平次は勘兵衛の方へピタリと向きました。

「それはもう、親分さん。娘の命を狙ねらう者を養子になどは——」
勘兵衛はブルブルと頭を振りました。

「よしよし。それでは、仲屋の先代の遺言通り、三千両に利息をつけて、この錦太郎に返してやっちゃどうだ。——いやならお白しら洲すへ持出すが」

「それは親分、殺生せつしょうですよ。三千両に十年間の利息をつけて出しちゃ、多賀屋が潰つぶれてしまいます」

勘兵衛は泣き出しそうです。

「貧乏になるのも洒落しゃれているぜ。世帯の苦勞をさせると、第一娘がもう少し伶俐りこうになるよ、貧乏の味のよさを知らないのが金持の落度なんだ」

「親分、それは可哀想じゃございませんか」

「まだまだ可哀想な人間は、広い世界にうんとあるぜ」

平次はなかなか譲ゆずりそうもありません。

「親分」

錦太郎は顔をあげました。

「何だい」

「お礼の申上げようもございません。——親分のお心持はよく解りました。そうとも知らずに、御手数を掛けた上、散々悪口を言うて——」

錦太郎はボロボロと涙をこぼしながら、畳の上へ双手もうてを突くのです。

「気が立つと、余計な事も言うものだ。そんな事は心配しなくて宜い」

と平次。

「親分、——私もこの上欲張よくばったことは申しません。あの化け娘と一緒にならずに三千両返して貰えば、それで沢山です、——利息なんか、一文も要りません」

「それは本気か、錦太郎」

平次は眉まゆを開きました。錦太郎の言葉が、この空気の中では、かなり予想外だったのです。

「本当ですとも、親分。六十になる母親の老先おいさきを幸せにするだけなら、三千両でも多過ぎるくらいで、あとは私が精いっぱい働き

ます。何んなら——」

「よしよし、それ以上負けさしちや、多賀屋も冥利みょうりが悪かろう。お前は思ったより良い男だ、手の混こんだ人殺しなんかするより、心を入れ替えて商売でも励はげむがよかろう。下女のお常の引かっ掻きくらは、俺が何とかしてやろう。なア、多賀屋」

「へエ」

「三千両の利息で、膏藥こうやくがどれくらい買えると思う」
平次はそんな無駄を言いながら、もう帰る支度をしておりまし
た。

×

×

溜飲りゅういんが下がったぜ、親分」

暁方近い街、女房のお静が待っている家路を急ぎながら、平次
は応こたえました。

「気の毒なのはお福さ、心柄とは言いながら、あれじゃ江戸中に
貰い手もあるまい」

「あつしは親分」

八五郎はニヤリニヤリとほろ苦い笑いを見せます。

「お前も気の毒だよ、たまたま祝言をする事になると思うと、そ
れが身代りだったりして、——でもあんな蓮葉はすつばむすめ娘と祝言しなくて
飛んだ仕合せよ。そのうちに、煮豆屋のお勘にまめやッ子にでも当って見
ねえ、あの娘の方が余っ程筋が宜いぜ」

「チエツ」

八五郎は大きな舌打を一つしましたが、腹の中では怒ってるわ
けではありません。親分平次の今晚の裁さばきの鮮あざやかさに、すっか
り陶醉していたのです。

（編注）

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「錢形平次捕物百話」第九卷 中央公論社 昭和十四年八月五日発行

底本―「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五月初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>